

「それで、あなたはこの世界の文明レベルが知りたくて、私の下着を触っていた、と？」  
数分後にシンが目覚めると、ピンク髪の少女は、疑わしげなジト目でそう言ってきた。

シンの世界から見たこの異世界、オーバードガイアの住人であり、この地方で集落のリーダーをしているということだった。

下着を観察されたのが恥ずかしかったのか、その頬は羞恥で赤く染まっており可愛らしい。そんな邪なことを考えながらも、シンは冷静に應對した。

「理解が早くて助かる。そういうわけで俺にやましいことはないのだ」

「じゃあ、何で服が乾いてもズボンはいてないんですかっ!？」

語気を強めたセルティの問いに、シンは僅かな逡巡の後、答える。

「俺が言葉でそれを伝えるのは容易い。だがあえて聞く。言われなければわからないか？」



「聞いても理解したくありませんっ！」

セルティの突っ込みに、シンはふむ、と頷き。

「この世界に来たら知らん間に脱がされていたのだ。おそらくは異世界の美女が俺の魅惑的なオスフェロモンを嗅ぎつけ、辛抱たまらなくなってしまったに違いない。——俺も罪な男だ」

「あなたが今背負っているのはただ猥褻罪わいせつですよっ！　じ、自警団さーんっ……！」

「落ち着けやめろ！　俺が悪かった！」

セルティが大声を出すと、さすがのシンも慌てる。

どうにか宥なだめることに成功すると、同時にひとつの疑問が湧いてきた。

「待て、自警団だと？　警察——もとい、国の衛兵などはここにはいないのか？」

「一応、他の村にはいるところもありますけど、この集落には来てません。モンスターに対抗できる戦力を、私たちはほとんど持ち合わせていないんですよ」

シンの問いに、セルティは困ったように苦笑する。

「三つの種族が寄り集まって集落を作り、この辺境で何とか生きてるんです。でも、それなりには平和ですから安心してください。えーっと……あなたは——」

「シンだ。俺の名は御剣シン、元いた世界では御曹司やっていた」

「オンゾウシ、ですか？」

「代々続く領主や貴族の跡取り、とでも言えば伝わるか？」

「つてえええっ！　あなたは貴族様だったんですか？　し、失礼致しましたシン様ッ」

慌てたセルティは、床に座り平伏する。

その胸元の開いた衣装の上から見える白い谷間を眺めながら、シンは困惑していた。

「……お前は少し騙だまされやす過ぎるだろう？　あまり異世界人の言葉を真に受けるな」

「え……、嘘うそだったんですかッ!?　ひどいですっ」

「いや、それは本当だがな——それより何故お前は日本語を話している？　この世界には様々な種族がいるようだが、言語関連はどうなっているのだ？」

「あ、それはですね。この世界独自の『法』が発動しているからです。ようは絶対神の恩恵により、異種族との翻訳が自動でされているんです。ですので安心してシン様は私の話を聞いて——って、勝手にどこ行く気なんですかッ!？」

椅子から立ち上がったシンが玄関へ向かおうとすると、慌ててセルティに止められる。

「日の落ちる前に、少し辺りを見学しようと思ってるな」

セルティの話だけならば夜でも聞ける。

そう判断したシンが申し出ると、

「ダメですっ！　今日は出歩かないでください。モンスターに会ったら死んじやいます。この世界はものすごく危険なんですからっ！」

「お、おい！　あまりくつつくな！　その——胸が当たる」

背中からセルティに抱きつかれたシンが、その心地よい柔らかさと弾力に戸惑う。

既に大勢と付き合った経験のあるシンだが、全てデート一日目で破局しているため、女性経験は全くと言っていいほどない。

それに、彼女はただ可愛らしいだけでなく、シンのプレイしている『パズル&ファンタジー』でのお気に入りの少女、『セルティア』にそっくりなのだ。

なので、いつもの御曹司らしい振る舞いができなくなる。

「しかし、俺はこのゲームの世界に入り込みでもしたのか？ 偶然にしてはあまりにも似ているが——」

「えっ？ シン様はわたしに、見覚えがあるんですか？」

「それはきつと、シンクロ現象のひとつですね」

キイツとドアが開く音とともに、突如見知らぬ少女が部屋に入ってくる。

しなやかなラインの体軀と、白いすべすべの肌。

幼さを残すも整った面立ちと麗しい金髪に加え、それ以上の特徴が少女にはあった。

先端が横に長く尖った耳と——神秘的な雰囲気。

いわゆるエルフと呼ばれる種族だろう。

「……美しい。あなたは一体——？」

「初めまして、僕はこの集落に住む半森精種の長——レストと申します。男同士仲良くしま

しょうね」

ニコツと微笑む彼の姿を見て、シンはしばらく項垂れた。

彼の手元にあるズボンは、シンの物を見つけたので拾ってきてくれたらしいが——。

「どうしてこう、神は俺に冷たいのだ……？」

それはさておき、さっそく気になったことを尋ねてみた。

「それで、そのシンクロ現象とはなんだ？ 俺のいた世界とここは、何らかの繋がりがあるというのか？」

首を傾げるシンに対し、レストはしずしずと告げる。

「ここ、最果ての世界、オーバードガイアは、他の異世界の影響を相互に受けています。この世界の伝説や逸話は、あなたたちの世界でも共通項として、何らかの形で存在している——というもののことです。はい、ズボン乾いてますよ？」

渡された自分のズボンをはきながら、シンは不可解な表情を浮かべる。

「先ほど土精種がどうか言っていたが、他にはどんな種族が存在しているのだ？」

「——はい。ここは七つの階層を為す多重世界で、住んでいる種族は数千種と言われています。半森精種たちのような亜人から、神や精霊、天使や悪魔などに至るまで。ここは最底辺の種族たちが集まる辺境の地『ネザーホライズン』で、集まる種族も最弱の部類です」

「なるほど。弱者であるが故に、こうして住みにくい土地へ追いやられたというわけか」

「ちよっ!? シン様! 酷いですよ、そんな言い方——」

「あはは……。でも、事実ですよ。この近辺では、『半森精種』、『土精種』、『鳥獣種』の三種族が寄り集まって暮らしています。ここはいずれ村……になる予定の集落ですね」

「ふむ、なかなか興味深い話だな。ちなみにそのセルティとかいうボンコツは、どの種族に分類されるのだ?」

「って、誰がボンコツですかっ!」

セルティの反論をスルーし、レストという少年は苦笑して答える。

「はい。セルティさんは精霊種にも匹敵する高位の存在です。故にこの指導者として、皆に慕われています」

レストのフォローを受けると、セルティは満足げに頷き、

「ここは、辺境オブ辺境にある安息のホテル『ピトスの宿』です。というわけで、まだ来たばかりのシン様を、わたしが守ってさしあげますよ——」

使命感に燃える瞳を向け、そう断言した。

「それで、宿泊代はいくらだ? まさかキャッシュカードが使えるわけでもあるまい」

「ツケですよ。トイチの利子が付きますので気をつけて——って、冗談ですってば! 出て行こうとしないでください! 外は危ないですからっ!」

なんとというかセルティは、割とお茶目な性格をしているらしい。

精霊とは思えない俗っぽさにシンが呆れつつ、ため息をつく。

「わかった。しばらくここで厄介になるとしよう」

「ありがとうございます! ちゃんとお世話させていただきますね」

パアツと満面の笑みを見せ、セルティは両手を合わせる。

何やら不思議な印象の少女だが、悪い存在ではなさそうだ。

羊のような肉を煮込んだシチューを食べ、今夜はここに泊まることになる。

割り当てられた宿の1室——たった六つしかない客間のひとつを貸してもらおう。

ロクに家具もない簡素な部屋。

寝具は粗末な薄い毛布だけだが、屋根と壁があるだけで寒さはだいぶ和らいでいた。

「ふう……、なんとか生き延びたか」

と、ランプが消えた部屋の中で、シンはふと窓の外を眺める。

紅と蒼に輝く二つの月が、この世界が夢でないことを示していた。

「異世界、か……」

たったひとり異世界へと飛ばされれば、普通はもつと取り乱すものなのかもしれない。が、『最高位の御曹司』であるシンは、冷静に現実を受け止めていた。

寂しさや未練はない。

ただ、ひとつだけ気になることがあった。

「俺はあの御剣の家で——かけがえのないものになれていたのだろうか？」  
 そう独りごちて、シンは静かに眠りへと落ちた。



「それじゃ、そっちへ流れてきた『はぐれ人』は、どうにか回収できたんだね？」  
 「はい。ひとまずなんとかまりました。ちよつと——どころかなりアレな性格ですけど、悪い人じゃない……と思います」

暗がりの中。『ピトスの宿』のリビングで、押し殺した声が聞こえる。

そこにいるのはウェイトレス姿のセルティと、『最下層の辺境』に住む、弱小の三種族——  
 半森精種、土精種、鳥獣種の代表たちだ。

本来はあまりに弱すぎて、種族のひとつとしてすら数えられない人類の処遇に関して、三人の頭領は、集落のリーダーであるセルティと相談していた。

「こつちもすごいことになってるよー。なんつーかアレ、なんだっけ？」

赤いハンチング帽を被った鳥獣種の少女が首を傾げると、隣のレストがため息をついた。

「洞窟にある巨熊の巣に、変な人間が入っちゃったんでしょピリカ？ もう忘れちゃったの」

「べ、べべべ別に鳥頭じゃないし！ ちょこつと忘れてただけだし！」

ピリカと呼ばれた鳥獣種の長が慌てて叫ぶと、その頭を隣から伸びた手が撫でた。

「ま、仕方ないさね。さすがに救出できる状況でもないだろうし、森のヌシを怒らせないよう、  
 気をつけるしかないよ」

どこか姉御肌な口調でそう言ったのは、土精種代表の妙齢の女性、ロゼッタだ。

革で出来た服の腰には鍛冶屋のように、手製の工具がいくつも差してある。

が、土精種というその種族名に反して、その格好はスリムで美しい。

「うちに来た『はぐれ人』はヤバイからねえ。いや、確かに人間とは思えない美女なんだが、  
 あつという間にみんなの心をつかんじまってる。男なんか全員、一日で骨抜き状態だよ」

「でも、土精種の人たちって、普段はかなり気難しいはずですよ？」

セルティがぼつりと言うと、ロゼッタは苦々しい顔で頭をかく。

「そのハズなんだけどねえ……、年寄りからガキンちよまで虜にされちまってるさ、今じゃ我  
 先に手製のアクセサリーをその子に贈ろうと争ってる始末さ」

「そうなんですか……」

半森精種の代表レストが呟き、感嘆を漏らす。

「というわけで、早いところこの宿に連れてくるよ。あんなのを匿ってたら、あたいの地位ま  
 で揺るがされちまう」

「子持ちのバツイチじゃ不利だねー……あだだだだだだあつ!? 冗談冗談ッ！」

からかつてきたピリカの頭を、その帽子ごとロゼッタは締め上げる。

それを苦笑しつつ眺めながら、レストはセルティに向き直った。

「それでまだ、あの連中には勘づかれていませんか？ 彼らのことを」

「……だと思えます。シン様が見つからないように、なんとか匿わないと——」

セルティは目を逸らしつつ、「口籠もる。」

彼ら——この世界に巣くう獐猛なモンスターよりも脅威として存在に、シンたち異世界からの漂流者を会わせるのは危険だ。

「大丈夫です。しばらくシン様たちには、大人しくしてもらいますから。普通、この世界に來たばかりの人は、みんなそうなりますよ」

パツと明るくセルティは微笑み、自身の手首を見る。

腕輪のように記された刻印に書かれているのは、『34 Aug』という文字。

金と力で構築されたオーバードガイアでの生命線とも呼べる概念——<sup>アウラ</sup>靈貨の残高が、そこに刻まれていた。



「つて、……ええええええええええつ!」

翌日の早朝。

シンがあることを申し出ると、セルティは目を白黒させた。

「何も驚くほどのことではないだろう？ 黙って人の世話を受け続けるのは、俺の性に合わないのではな」

「何言ってるんですかシン様は！ まだチュートリアルなんですからじつとしてくださいよ！ 洗濯とかお掃除とか料理とか、水汲みとか薪拾いとか手伝って欲しいところですよ！」

「ボロを出したなこのボンコツ精霊め……。この俺をコキ使おうと企んでいたな——」

「はっ……!? い、いや、でもですよ。実際シン様は「宿一飯の恩義がわたしにあるわけですし、ちよつと説明の前振りのためにも必要なんですよ——つて、もう外に出てますし!」

「少し武器を借りるぞ。さすがに丸腰では心許ない」

と、室内においてあったスコップを持ち外へ出たシンを、慌ててセルティは追う。

「待ってください！ 魔物との戦闘は、『契約戦争』の対象外なんですよ!? あっさり殺されちゃいますつてば!」

必死の訴えに、シンはくりりと振り返り、セルティを見る。

「ま、俺も昨日の今日で無茶をするつもりはない。倒せそうな雑魚モンスターをハントしてみようというわけだ」

「ふっふっふ。シン様は甘いですね。貴族様のお子さんらしく甘ちゃんです。例えば漂流して

きた人たちはスライムを侮りますが、この世界ではスライムすら強敵なんです。鎧と剣で武装したくらいじゃ、手も足もない相手なんですよ？　そこで、精霊であるわたしとお金の出番です！　この世界独自の——ってもう戦ってますしっ！」

得意げに話していたセルティが、慌てて離れた位置にいるシンを追いかける。

そこには既に、人の背丈をゆうに超える水色の塊——スライムが立ちはだかっていた。意外に早いタックルをシンはかわすと、その背にスコップの先端を打ち込む。

「ふむ……。どうやら酸性の体液を持っているようだな。そして殴っても効かん」

「ちよっ、スコップが錆びますのでやめてください！　てか何で普通に戦ってるんですか!?」  
巨大なスライムの攻撃を足場の悪い雪上で難なく躲すシンの動きに、セルティは驚きつつ助けに向かう。が、

「そのスライムは生きてる状態だと、無機物を溶かしてきます！　そして一度捕まったら、隠された心臓を破壊しない限り——きゃあああっ!」

慌てて走ってきたセルティがこけて、そのままスライムへと滑りながら突っ込む。

直後、セルティは顔と両手と足だけを外に残し、ずっぱりとスライムに取り込まれた。

「あ……」

シンとセルティの目が合う。

数秒の沈黙が流れたあと、セルティは涙目で悲鳴を上げた。

「——助けてくださあいつ!」

「アホかお前はッ!」

完全にセルティの身体はスライムに埋まり、拘束されている。

だが、シンはすぐに動かない。

単純に薄情というわけではなく、状況が変わったのだ。

シンがさっきまで想定していた倒し方の秘策、それを試すことができなくなった。

（持ち込んでいたこの道具は使えない、か……。ならば心臓とやらを見つけねばならんな）

そう素早く判断し様子を窺っていると、予想外の出来事が起きた。

「む——!」

「はわわっ!?! 服が溶かされてますー!?!」

セルティが纏うウェイトレス風のブラウスとスカートが溶け始め、半透明の粘液を通して、あられもない下着姿を晒しているのだ。

衣装の上からでもそれは見て取れたが、服が溶けると更にすごい。

布に押し込められていた大きな胸と、むっちりとした太股の張り。

それがねばねばの粘液に塗れて、反り返るポーズを取っているのだ。

あまりのいやらしさに、思わずスマートフォン撮影機能を使いたくなる。

「はうっ……!　って何まじまじと観察してるんですか!?!」

「いや、スライムの中にあるという心臓を探しているのだが、それも透明なのかよくわからん。決してお前の裸に興味があるわけではないぞ。ふむ……焚き火の火などは効かないようだな」  
「最っ低ですこの人!? 人の心を持ってないですよ! こんなことで大切な霊貨アウラを使いたくないですよー! 誰かああー!」

「そうか、何やらこの世界固有のシステムがあるようだな」

霊貨アウラ——先ほど聞いた単語だが、それがこの世界の鍵となるものなのだろうか?

「まあしかし、この辺にしておいてやろう。だいたいもうこの敵のことはわかった」

「えっ……?」

セルティが首を傾げた瞬間、スコップの先端がスライムに刺し込まれる。

そして、間髪入れずにそこは別の下段部分へ、鋭い蹴りが放たれた。

「ギョー! オオオオオオオオオオオ……!」

硬い寒天の塊のような抵抗を突き破り、何かが碎ける感触がする。

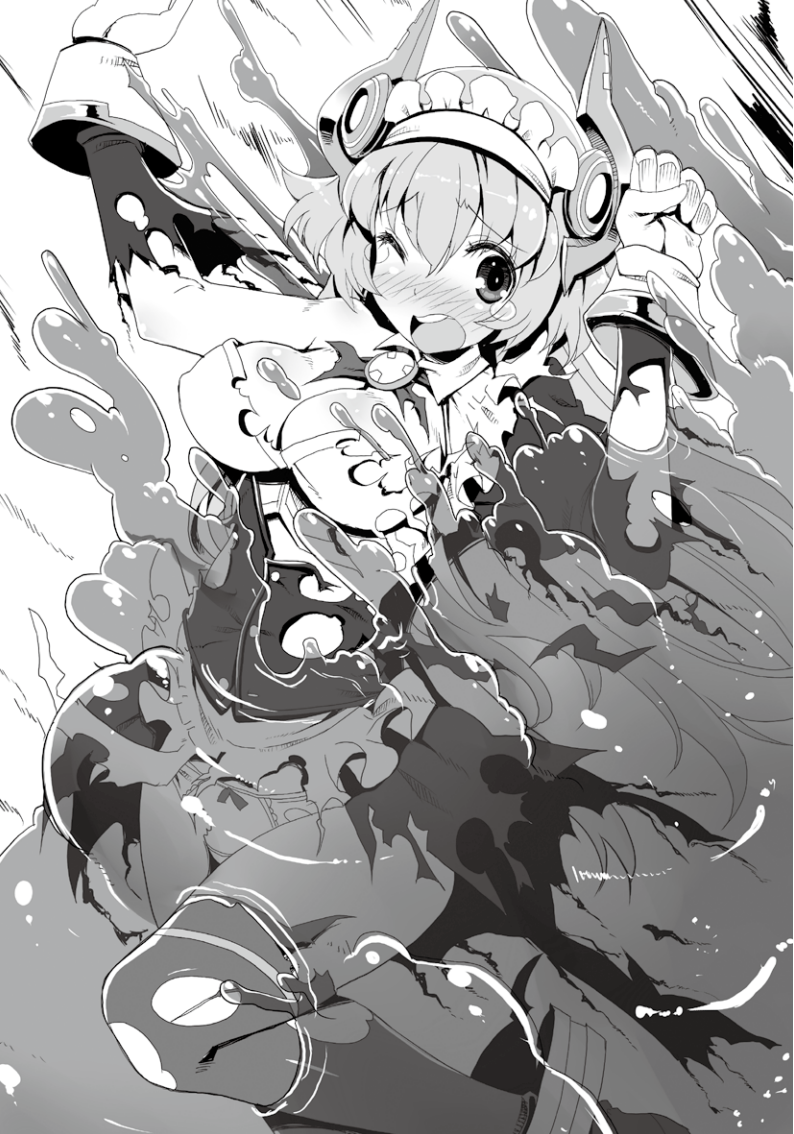
直後、セルティを拘束していたスライムの身体が溶け、雪の上へだらりと広がった。

「ど、どうして——!? 人が生身で、モンスターを倒せるだなんて……!」

それがよほど異常なことだったのか、セルティは両手で肌を隠しつつ感嘆する。

対するシンは当然のように襟を正し、死骸を「瞥いちづしただけだった。

「悪いな雑魚モンスター。救助のために、つい少し本気を出してしまったようだ」





そう何事もなかったように声をかけ、自分のベストを脱ぎ、セルティに差し出す。  
が、肝心のセルティは呆然としながら、シンを見上げていた。

「そう驚くほどのことでもあるまい。心臓の場所さえわかれば容易い相手だろう?」

「い、いえ、でもスライムは、常に心臓の位置を移動させてるんですよ!? その心臓自体も透明ですし——」

「ああ、なかなかどうして知恵はあるようだ。俺が最初にシヤベルを差し込んだとき、その動きを察して心臓を前面から逃がしていた。だから、お前を助けるのを少し待った。その溶けた衣類が散らばり、スライムの体液の流れをわかりやすくするため。おかげでフェイントの一撃がやりやすかった」

「……………」

ぽかん、と。セルティは目を丸くして眼前の男を見る。

そもそもこの手のスライムの倒し方は、手数を多くして心臓を狙うか、スキルによって全体を叩くのが鉄則だと思っていた。

いや——そもそもスライムの心臓として岩のように硬く、易々とは破壊できないはずなのに。

(なのに、何なんですか、この人は……)

初見から僅かな時間で敵の弱点を見抜き、人の力を凌駕するモンスターを瞬殺した。  
あり得ない。

このオーバードガイアにおいて、種族としてすら認められない雑種<sup>ヒュムフリット</sup>は、持ち込むモノや知識にこそ見るべきものはあるが、それを奪われてしまえば終わり。

そんな弱いはずの生き物の『はぐれ人』が、これほどまでに強いなど。

「……ああ、これは少し言いづらいのだが——」

「な、何ですか?」

ふいに沈黙を破ったシンの言葉にセルティは驚く。

見れば目の前の少年は顔を逸らしつつ、微かに頬を染めていた。

「さすがに精霊とはいえ、その格好では風邪を引かないのかと思ってな。いや、俺的には正直、もう少し見ていたいのだが……」

「ッ——!」

その一言で、セルティの顔が真っ赤に染まる。

直後、その手は粘液の中に埋まっていたスコップをつかんでいた。

「いやあああああああつ!」



「——で、その怪我は結局。モンスターではなくセルティさんにやられたんですか?」

「ああ……、久々に死ぬかと思ったぞ。あのボンコツ精霊は人を何だと思っている」  
 「あはは、でもまあ直接当たらなくてよかったですよ。おかげでペナルティが軽かったみたいですから」

数分後。

半森精種<sup>ハーフエルフ</sup>の少年レストから治療を受け、頭に包帯を巻いたシンは、裏の畑に出向いていた。  
 『最下層の辺境』たるこの地には、現在十数種類の種族が混在している。

その中でも北に位置するこの山の中腹に、『ピトスの宿』があるのだが――。

「というわけでシン様。少しばかりこの集落の説明を致しますね。生活する上での基盤になりますので」

スライムを仕留めた件である程度信頼されたのか、着替えたセルティから説明を受ける。

シンは倒したスライムの体液を調べるために、残った体液をビン詰めにしつつ、その話を聞くことにした。

集落には畑と家畜小屋、井戸があり、ここに住む半森精種<sup>ハーフエルフ</sup>百人ほどの水と食料<sup>まかな</sup>を賄っている。生活手段は主に農耕。

畑及び、牛、豚、鶏などの家畜を守りながら育てるのが、半森精種<sup>ハーフエルフ</sup>の役目となる。

種族の特徴としては、現代で聞いていた噂<sup>うわさ</sup>通り、耳が長く色白の美形が多い。

が、話を聞きながら辺りを眺めつつ、シンは怪訝<sup>けげん</sup>な顔をしていた。

「その割には農地の規模が小さいな。土地があまり肥えていないとはいえ、人手を集めてもう少し広げるべきだろう？ この有様では日々の食料にも事欠くに違いあるまい」

「うぐっ!? 初見のくせに痛いところを……」

一応は三種族<sup>ドラフ</sup>のリーダーである自負があるのか、セルティは微妙に凹んだ顔を見せる。

森の方角には土精種<sup>ドラフ</sup>の住む洞穴があり、彼らの生活基盤は鍛冶と工作。

洞穴から石炭や鉄鉱石を掘り出し、武器や工具を仕立てて生きている。

「武器も数百人もいる群れの割には数が少なそうだ。大量生産しておくべきではないか？」

「あーもう、いろいろな事情があるんですけど……」

そして最後に鳥獣種<sup>ハルビイ</sup>たちは、巨木の上に巢を構え、狩猟により生計を立てている。

巨大な冬ウサギや、鳥、鹿<sup>しか</sup>、猪<sup>いのしし</sup>に、大熊などのモンスターを捕らえているとのことだった。

「昨日食べたシチューも、お肉をわけてもらったんですよー」

「ああ、周囲の雪で保存はされていたのだろうが、血抜きを徹底し、保存食も作った方がいいと思うぞ。味わいい万人向けにした方が売り物にもしやすいからな」

「なんでここに来たばかりの人が、わたしたちの暮らしを心配してるんですかつ!?」

「悪かった。ただの職業病だ」

セルティの叫びに、シンは素っ気なく返しながら、呟く。

「職業病って――、シン様が領主様のご子息だという話ですよね？」

「そうだな。だが実際はそこまで大層なものじゃない。俺は事実上ただの便利屋に過ぎん」  
「便利屋、ですか？」

どこか今までのシンとは違う態度に、セルティが聞き返す。

「ああ。俺は代行役であり、交渉人であり——そして指導者だ。もとより領主とは、人の上に立つ支配階級の人間とはそうしたものだ。俺は昔から、そうなるべく教育を受けて生きてきた」

その言葉には、別段苦しみなどの負の感情は込められていない。

だが逆に、何か自負や矜持きんちのような熱もなかった。

ただ役割を淡々とこなしてきただけ。

そんな印象のシンの表情を見て、セルティは考える。

「……そう、だったんですか。じゃあ、シン様はわたしのライバルですね」

「何？」

「わたしもこの集落のリーダーですから、向こうの世界でのリーダーのシン様には負けませんよ。ちゃんと、平和主義のギルドマスター見習いとして、あなたのことを守ってみせます！」  
ぱつんと弾けそうな胸を張り、得意げにそう微笑んでみせる。

見ているだけで元気が出てきそうな、明るいつき顔だった。

「……期待しておこう。早くスライムが現れないだろうか？ 今度は撮らねば」

「あー、バカにしてもう。まだシン様は、この世界の仕組みもわかってないんですからね」

ぷうつと頬を膨らませ、子供のようにそっぽを向くセルティ。

それを苦笑して眺めつつ、シンは薄々察している。

この土地——いや、この世界の法則とも呼べる力のことを。

（やはりそうだ。この世界はおそらく……）

シンが口に出そうとしたそのとき、宿の裏手から、慌ただしい足音が聞こえてくる。

「セルティさん！ ピリカとロゼッタが来たよ。何か急ぎの用だって——」

「はい!? それって、まさか……!?」

半森精種代表レストの一言に、セルティは首を傾げる。

「うん。今回漂流してきた残り二人の人で。彼女たちを、なんとかこっちで引き取ってもらえないかって、何か困ってるらしくて——」

「って、そっちの二人も問題なんですかっ!?」

セルティが驚く背後で、シンは微かに眼鏡のブリッジを人差し指と中指で押さえる。

『漂流者』と『二人』そして、問題を起こしている少女二名。

シンがとある連想をした直後、宿の扉が開き、二人の少女が姿を見せた。

「……なんか、知ってる顔がまたいるです」

「ふーん。あんたもなかなか楽しそうじゃない」

鳥獸種<sup>ハルビイ</sup>のピリカに連れられてきたのは、寡黙な白バーカーの少女、枢木冥夢<sup>くろぎめいむ</sup>。  
土精種<sup>ドラフ</sup>の代表ロゼッタの前には、黒いレザーのステージ衣装を身につけた、帝ノ凜紅<sup>みかどのりんく</sup>だった。

「やれやれ、やっぱりお前たちだったか」

シンは感嘆を漏らしつつ、同じく現代で名を馳せていた二人を見る。  
新たな波乱の幕が上がるうとしていた。

## STAGE 2

### 三強集結



時は前日——現代日本のクリスマススイヴに遡<sup>さかのぼ</sup>る。

都内のはずれにある、大きな和風の屋敷がある敷地は、ある意味有名な家だった。

枢木家は、江戸時代より隆盛<sup>りゅうせい</sup>した忍<sup>しの</sup>の家系。

暗殺<sup>あんころ</sup>、謀報<sup>ちようほう</sup>、警備<sup>けいび</sup>、破壊工作を生業とするその一族は、時代とともにその技術や道具を進化させ、弛まぬ日々の研鑽<sup>けんさん</sup>により、今もなお仕事を請け負っていた。

依頼は主に政府や大企業からだが、彼ら権力者の子飼いではない。

あくまでその卓越した技術と能力を以て、依頼された任務をこなす傭兵<sup>ちやうへい</sup>集団だ。

ネパールのグルカ兵を思わせるプロの集団だが、その中でも本家の『枢木』は、人外めいた強さを誇る。

そして今宵もまたひとつの事件が、その枢木の屋敷で起こっていた。

「畜生おおお！ なんなんだよこの屋敷はあああああ！」

無数の銃声が響き、閃光<sup>せんこう</sup>が瞬<sup>はなづか</sup>く中、某広域暴力団の部隊が悲鳴を上げている。

襲撃のために連れてきた大勢の部下はあっさりやられ、屋敷に入る前にはぐれてしまった。

組長を暗殺された報復として乗り込んだヤクザたちだったが、それは失策だったことを今頃になって悟る。

雑木林を抜けて屋敷へ着く前に、毘にかかって人数は半減。

放たれていた猟犬に襲われ更に半減。

そして今、姿も見えない敵からの不意打ちを受け、見事に全滅しかけていた。

「クソが……！ 聞いてねえぞ、こんなこと！」

状況から見て大勢は決しているが、手ぶらでは帰れない。

「極道の意地つてもんを見せてやるぜ……、この忍者野郎どもめ！」

人気のない屋敷の別宅をゆつくりと歩きながら、男は拳銃の撃鉄を起こす。

拳銃という最強の武器を手にしたことで、男は幾分か落ち着きを取り戻した。

すると薄闇の家屋の中、微かな灯りに吸い寄せられる。

僅かに開いた部屋の隙間から見えた光景に、思わず男は息を呑んだ。

「んんっ？ なんだこりゃ……!？」

ごちゃごちゃと散らかった汚い部屋。

床に広がるピンクのカーペット上には、お菓子の袋やペットボトル、コミックやゲーム機器が散乱している。

そしてその中央の猫型クッションの上に、ひとりの少女がうつぶせで寝そべっていた。

オバケイラストがついた白のパーカーと、ジーンズのホットパンツに縞々のニーソックス。室内にもかかわらずフードを被っているで顔はわからないが、その体軀からして小学生くらいの女の子だと想像がつく。

（榎木家が攫ってきたどこぞのガキか？ いや待てよ、そういえば前に聞いたぞ。榎木家の当

主は、まだ年端もいかない子供だとか……）

噂を聞いたときは鼻で笑ったものだが、まさかこれが？ と男は考え直す。

これが榎木家の一員であれば暗殺は容易いが、子供ひとりを殺す以上は、獲物を確認する必要があった。

「——おい。動くな！」

「……ッ!？」

男がドスのきいた声を出すと、ビクッと背筋を逸らして少女が振り返る。

艶やかなショート黒髪と、宝石のような蒼の瞳。

可愛らしい無表情の少女だが、さすがにこの状況には戸惑っているのか、半目のまま汗をかいていた。

「な、何かわたしに用、ですか……?」

眩くような細かい声。

自分と銃に怯えている——そう判断した男は安堵の息をつき、改めて少女に問いかけた。



「怖がるなよ嬢ちゃん。言うことを聞けば殺しやしねえさ。名前は何？」

「えと……、これはニヤン太郎といいます……です」

「そのぬいぐるみの名前じゃねえっ！ てめえの名前だッ！」

「……はうっ!? ごめんなさい、です」

頭を抱えて、幼い少女は怯える。

（やれやれ、本当のガキだな。枢木どころか、ただの小学生じゃねえか）

嘆息しつつヤクザの男が続き等待つと、ぼつりと少女が呟いた。

「枢木、冥夢<sup>めいむ</sup>といいます……です」

「ああ、枢木ね——……何いっ!?」

投げやりに言いかけたそのとき、男に戦慄が走る。

（今、枢木冥夢と言ったのか？ じゃあ、コイツが——噂の当主!?）

現代最高位の暗殺課報機関である、『枢木』。

その中でも図抜けた実力を持つ若き天才が、一族のトップに立っている噂を聞いていた。

「なるほどな。そういうことか」

にやりと、暴力団の男は納得したように笑う。

こんな臆病者の自堕落な少女が、殺人鬼一族、枢木の頂点であるはずがない。

おそらくは、一族の中でも使い物にならない子供を人目に触れさせず、その噂のみを喧伝<sup>けんでん</sup>

させる材料に使ったのだろう。

つまり——格好の獲物だ。

「悪いな嬢ちゃん。組長の顔に泥を塗った家族を恨んでくれ。こういう稼業なんだ。恨みつきはナシだぜえ」

男は薄ら笑いを浮かべつつ、少女に対して銃口を向ける。

が、そんな脅しにも動じず、目の前の少女は首を傾げていた。

「わたし、人殺しはしてないです。あなたもやめた方がいいですよ」

無表情のまま淡々と、落ち着き払った様で、冥夢と名乗った少女は話しかける。

男は思わず苦笑するが、戯れている時間はもうなかった。

「はっはっは、安心しな。苦しまずに一発で逝かせてやんよお」

ガウンッ！ と、轟音とともに弾丸が発射され、少女の小さな頭に風穴が空く。

——が、そんな予想が実現する前に、男の身体に衝撃が走った。

「なあっ!?」

全身数箇所を、針で打たれたような痛みが貫く。

眼前の少女が、いつの間にか消えている。

その現実には気づいたとき、男は既に立ったまま、指一本も身体を動かさなくなっていた。

「……壊しちゃダメです。このゲーム機、高かったですから」

まるで世間話でもするような少女の呟きが、男の背後から聞こえてくる。

何が起こったのか、何をされたのかもわからない。

だが、この恐るべき現実には理解していた。

(コイツがやったのか!? 今の俺だけじゃなく、この敷地内まで辿り着いた、全員——)

一瞬で眼前から背後に回った瞬発力と身のこなし。

更には身体の内を奪った謎の技に、男は直立したまま冷や汗を流す。

一方冥夢は、部屋の隅にあったスニーカーを手に取り、ゆっくりと履き始めた。

「あなたをお手伝いさんに引き取ってもらわないと困ります。外に出るの嫌ですけど、ちょうどポテチとコーラも切れそうでしたし」

全く関係のないところで嫌がりつつ、冥夢はおどおどしながら部屋の外に出る。

(俺はおやつを補充するついでかよっ!?)

男が恐怖に震えつつ突っ込んだそのとき、落雷の閃光が辺りを包む。

「ぐっ——!?!」

轟音に怯え目を閉じた後、再び男は目を開く。

少女の姿は——忽然と消えていた。

「ここは……どこですか?」

後に異世界の雪山で目覚めた少女は、極寒の中で洞穴を見つけ、帰ってきた森のヌシ——巨大熊を素手で昏倒させていた。

「ゲームとこたつ、ほしいです」

アンニユイで無気力な半目のまま、ずずっと出てきた鼻水をすすする。

「周りに、気配が多くて……。怖いです」

そして、洞穴の外を取り囲む気配に怯えながら、救助が来るのを待つことにした。



「みんな！ 今日に来てくれてありがとう！ まだまだこれからだよー！」

冥夢が現代から消えるその数分前。

ドームでのクリスマスライブで、計八時間にも及ぶ大規模のステージを、たったひとりの少女が支配していた。

観客を蕩けさせる熱狂の渦。

席を埋め尽くす信者たちの声援が、地鳴りのような咆哮を響かせていた。

「すごいですね。マネージャーさん！」

「ああ、あれだけのハードスケジュールなのに、頭が下がる思いだよ」

何人ものアイドルを担当してきた宮川という三十代の男マネージャーは、裏方からステージを眺めつつ感嘆する。

十三歳でデビュー後、僅か二年足らずで超人気タレントにまで上り詰めるという例は、この世界ではそこまで珍しくはない。

だが、歌、踊り、声優、絵、役者などを含め、複数の芸能ジャンルで人気を総なめにしていく少女は、さすがに歴史を振り返っても見たことがない。

しかも彼女は、日本に存在した特権階級の貴族、『帝ノ』の末裔だ。

占いによる政治の助力を行っていた彼女の家系は、人を惹きつける象徴としての役目を果たしていたと聞が、それはあくまで過去のこと。

現代においての彼らは、その神聖さのみを尊ばれ、国に保護されているだけの存在だった。

いわば、立派な額縁に飾られた空っぽの絵。

だが帝ノ凜紅という伝説は、家の反対を振り切ってアイドルとなり、あつさりと鮮やかな絵を描き出した。

単に技術や個性があるというだけでは、ここまではこれないと宮川は思う。

いわば、彼女という存在そのものが、別次元なのだ。

今は世界で最も稼ぐ現役女子高生として名を馳せ、こうして大勢の観客を魅了している。ステージ上ではうつつすらと汗を浮かべながらも、楽しげに今もダンスを踊っている。



そのEカップはあるうかという胸の膨らみと日本人らしくない金髪に、ルビーを思わせる真紅の瞳。

だが、この常人離れた容姿が不思議と違和感なく、親しみ易さすら抱かせる。ステージ開始から五時間を経過した状況でも、彼女の歌に乱れはない。

「みんなー！ メリークリスマス！」

曲の間奏中。凜紅が観客に手を振りつつ、ステージの前面に躍り出る。

それはあくまで予定されていた演出のはずだったが、このとき予想だにしないアクシデントが発生した。

観客の最前席にいたひとりの男が興奮し、ステージをよじ登って凜紅に襲いかかったのだ。

「り、凜紅ちゃあああんっ！ 最高だあああああっ！」

「——ッ!？」

間奏中ではあるが、よそを向いて歓声に応えていた凜紅の横から、抱きしめんばかりに両腕を広げてファンの男が突撃する。

悪意ではなく、感極まったの行動なのだろうが、非常にまずい。

が、それを見た凜紅はとっさにくるりと身をひねり、ダンスの一部のように自らのジャケットで男を絡め取る。

そしてその両腕を軽く拘束すると、どよめく観客に向かって手を振った。

「みんなー！ 熱くなってもステージに上がっちゃダメだよ。危ないから気をつけてねー」

満面の笑みでステージを立て直すと、その見事な手際に、更に観客が沸き立つ。

興奮したファンの男に怪我を負わせることも負わされることもなく、凜紅はステージを続行する。

こういったファンの暴走は、多くはないが有り得ないことではない。

が、本来は熟練したアイドルや歌手でも戸惑ってしまうはずのトラブルを、マネージャーの宮川や係員が対策する間もなく解決してしまった。

「本当に彼女……、十五歳なんですか？」

係員が目立たぬようファンの男を連れて行く傍ら、裏方で女性のプロデューサーが呟く。

この大イベントでもまるで動じない胆力と、会場をまとめ上げる歌と踊り。

それだけでも十分驚嘆に値するが、宮川はもうひとつのトラブルに気づき焦った。

「まずい！ マイクがなくなってるぞ！」

凜紅がつけていたヘッドマイクが、さっきのどさくさで外れている。

客の大半は熱気と興奮で気づいていないが、曲が再開されれば違いは明らかにになる。

だが、彼女にマイクを手配する暇もなく、間奏が終わってしまふ。

中断もやむを得ない——。

事態に気づいた全員がそう思ったとき、凜紅は何事もなかったように、ヘッドマイクなしで

の歌を再開した。

「——なに?」

これには裏方にある宮川ともども、あぜん啞然とするしかない。

マイクがなくなつた状態でありながら、全く変わらない声量と音量、そして音程で、凜紅は最後のサビを歌っているのだ。

信じがたい彼女のパフォーマンスに、観客たちが更に熱狂する。

そこから数分してステージが一段落する間。

彼女の圧倒的な実力とカリスマが、このステージの時間を支配していた。

「休憩終わり——つと。さーで、シメメの仕事に取りかりますかー」

最後の一曲を残した休憩室。

んー、つと両手を組んで背伸びをし、何事もなかったように凜紅は言う。

謝罪と礼の言葉を繰り返すスタッフたちに手を振り、ステージへと戻つていった。

「……彼女、本当に何者なんですか? いや経歴は知っていますが——」

今回初めて生身で凜紅を目にした音響係が、呆然として呟く。

「強いていうなら、帝ノ凜紅という存在そのものだな」

決して誇張ではなく、宮川にはそうと思えない。



既に、彼女に比肩するようなアーティストは現状この日本にはいない。いずれ世界にまで羽を広げ、それすら手中に収める日も遠くはないだろう。だが、彼女にとってはこの世界という舞台すら、狭過ぎるとさえ思っていた。

「——わからない。たかが凡人マネージャーの俺には、人を超越した彼女の気持など）ステージで華麗なステツプを踏む凜紅を見ながら、宮川は感慨に耽る。

『私のことどう思います？ アイドルとかになれそうですか？』

家族を説得して家出してきたという三年前の凜紅の言葉を、宮川は今も覚えている。裕福な貴族階級の家と、安寧の生活から抜け出してまで、何故彼女がアイドルを希望したのかは、何度か聞いたがはぐらかされるだけだった。

凜紅の言葉や仕草、一挙一動で、津波のような歓声が起こり、熱が高まる。

そんな興奮の坩堝と化した熱狂のステージが暗転し、全ての事象が消滅した。

「停電か!? 何が起きた!?」

数秒後、漆黒の帳（とほり）が上がり、元の世界が甦る。

だが、会場は不可解などよめきに包まれていた。

「何があった——!? 凜紅は……どこへ!?」

この日を境に、伝説の『偶像神』は消え、語り継がれる神話となる。

そして気づけば少女は、異世界の雪山の集落のど真ん中に立っていた。

見たこともない景色と、見たこともない妖精のような民の群れ。

桁違いの胆力を持つ帝ノ凜紅といえ、さすがに困惑を隠せず頬をつねった。

「んー……。夢でもないみたいだし、ひとまずコレを受け入れるしかないのかな?」

周囲を見れば、凜紅を見て驚き警戒しているとはいえ、文明のある世界らしい。

おまけに原理は不明だが、日本語らしき囁き声も聞こえてくる。

「『はぐれ人』の娘? 子だべか? 落ちてくるところをみるのは初めてだべ」

「にしても、かなりの器量だべなあ。うちの姐さんより綺麗だなあ。……ああ今のは嘘だつべ、告げ口しねえでける!」

ふむ。と、戸惑ったまま固まる演技をしながら、凜紅は彼らの挙動を観察する。

ステージから観客の雰囲気や精緻に読み取るように、僅か数秒のうちに、自分の魅力という武器が通じることを確信した。

芸能人が持つオーラというのは、実在する。

その個人が持つ容姿や表情、自信、仕草——雰囲気や空気による演出だ。

人に見られることを研究し極限まで研ぎ澄ませている帝ノ凜紅は、瞬時に彼ら向けの態度を作り上げ、実行した。

「突然お邪魔してごめんなさい。ここはなんという世界なのか、聞いてもいいかしら?」

屈託のない笑顔を見せ、土精種<sup>ドラフ</sup>たちの庇護欲<sup>ひこ</sup>を誘う。  
(こういう挑戦も、悪くはないわね)

自分に異種族の注目が集まるのを感じながら、凜紅は小悪魔な笑みを浮かべていた。



「ふうん。そんなことが起きてたんだ」

セルティが営む『ピトスの宿』のテーブル席。

現代組の三人と異世界の三種族の代表たちが一堂に会する中、今回の経緯を確認した凜紅が呟いた。

御剣シンとはほぼ同時刻にオーバードガイアに来ていた残る三強の二人は、同じく突如としてこの世界へ転送され、各々過ごしていたらしい。

暗殺者の枢木冥夢は山頂付近にある鳥獣種<sup>ハイベイ</sup>の縄張りを荒らしていた大熊<sup>ハウルベア</sup>を眠らせ追いついたあと、鳥獣種たちの気配を恐がり引きこもっていたが、やがて腹が減り動けなくなつたところを捕獲されたという。

「いやねー。ビビったよー。なんせあの巨大熊を倒したんだからどんな化け物かと思ったら、奥の方で寝てるだけなんでもん」

鳥獣種<sup>ハイベイ</sup>一族の代表たる少女、ピリカが苦笑すると、御剣シンがため息を漏らす。

「こいつは極度のヒキコモリだからな。大勢の人がいる場所へは出たがらない。お互いに恐れていたわけだ」

「シンは、うるさいです」

無表情ながらも、やや恥ずかしそうに頬を膨らませ、冥夢が呟く。

「何？ あんたら知り合いなの？」

それを見た凜紅が、興味深げに隣から身を乗り出してきた。

「ああ。二年ほど前に、こいつが俺を暗殺しようとして忍び込んできたので、一戦交えた。ところであのときの半壊した屋敷のリフォーム代を、まだもらっていないのだから？」

「暗殺じゃなくて課報です。しかもあれは、偽りの任務をつかまされてただけです。お金は騙した組織<sup>だま</sup>からもらってください」

冥夢は御剣シンの身辺調査を依頼され忍び込んだが、そのとき初めて発見された。

シンはそのまま侵入者の冥夢を捕らえようとし、戦ったというわけだ。

「ふうん。私がこの眼鏡<sup>めがね</sup>と会ったのは一年前かしら？ なんかスマホゲームのイベントで顔を出したときに、ちらっとね。あんたとは初対面だけど、噂は聞いているわ」

「……わたしも凜紅の噂や声、ネットゲとアニメでよく聞いているです」

などと三人が挨拶を交わす中、ほんと真ん中にセルティが座った。

「えー、お話しているところ申し訳ないんですが、もう一度改めて説明させていただきます」  
 ぞこない態度だが、精一杯この場を仕切ろうという気概を感じる。

「この世界は、あなたたちにとつての異世界『オーバードガイア』といえます。世界の果て、あらゆる種族の行き着く最果ての地と呼ばれる場所です」

「で、ここは比較したいしたことのないモンスターが溢<sup>あふ</sup>れている貧乏な集落で、ヘタレな巨乳精霊が指揮を執って暮らしていると——そういうことだな」

「ヘタレは余計ですっ!？」

隣で呟くシンのほやきに、セルティは即座に突っ込む。

「この世界での脅威は自然現象もそうですが、言語が通じない怪物たち——モンスターも脅威です。ここに流れ着く人々は、そのままではすぐ死んでしまいます。この世界独自のシステムを理解して、力を手に入れないと……」

「別にそんなものなかるうが、スライムと熊くらい倒せたが？」

「だからどうしてなんですか!? おかしいですよ皆さんは! 普通は武器があつて集団でも倒せないはずの相手なんです!」

「あ、あの、落ち着いてください、セルティさん」

声を荒らげるセルティを、半森精種<sup>ハーフエルフ</sup>の美少年レストが宥<sup>なだ</sup>める。

彼女のメロンのような胸が震えるのを、シンは真面目な表情で眺めつつ、

「つまり——、これを利用して何かができる、ということだろうか」

何やら記号と文字が刻まれた右手首を掲げ、言い切った。

「ツ……!？」

それを見たセルティが驚きに目を見開き、土精種<sup>ドゥーフ</sup>のロゼッタが怪訝<sup>けげん</sup>な顔をする。

「あんた気づいてたのかい? この世界の霊貨<sup>アウラ</sup>と刻印<sup>ウイザリット</sup>の仕組みについて」

「正式に話を聞いたわけではないがな」

シンはそうさりと流す。

「そういえばここに来てから、なんか腕に変な模様がついてます」

「こういうの仕事上邪魔になるんだけど、取れないの?」

「取ったらダメだよ! 取られてもダメ! その瞬間ほぼ死んじやうから——あ……!」  
 と、言いかけたピリカが慌<sup>あわ</sup>てて自分の翼で口を塞ぐ。

それを見た半森精種<sup>ハーフエルフ</sup>のレストが、慌<sup>あわ</sup>てて手をバタバタさせた。

「ちよっ!? 違いますよ、その、死んじやうつてのはものの例えで——」

「そうですっ! 別にピリカさんが鳥頭だからうっかりしてたわけではないですし!」

「ふ——ん?」

と、物騒な一言にも動じず、凜紅が身を乗り出してセルティに顔を寄せる。

「それはこの腕に刻まれた数字が関係しているのかしら? 時間制限があるのか、一日が過ぎ

ることに、減っているみたいだけど」

「……………」

「セルティ。この連中はビビるタマじゃなさそうだ。バツサリ言った方が早そうだよ？」

ロゼッタの一言に頷いて、セルティは背筋を正す。

「厳密に言うとな、その数字は時間ではありません。皆さんここに来たらばかりの方は霊貨——、神々の通貨がワンコインずつ減っているんです。この世界に存在し、『法』の恩恵を受けるために徴収される『存在費』……言わば税金のようなものですね」

そう言っ、セルティは自身の刻印を掲げてみせる。

そこにはシンが昨日見たものより数が少ない、『30 Au』という文字に置き換わっていた。

「私はギルドマスターの階位についているので、一日三枚ほどの霊貨を消費しています。他は貴族や領主などの階位によっても、日々消費する霊貨の枚数が違います」

ちなみにセルティ曰く、以前来た他の漂流者——人間たちの話から察すると、一霊貨の価値は、日本円で一万円ほどの感覚らしい。

「神々の通貨——それを支払い我々は庇護を受けている、と。なるほど、異種族同士で言語が通じるのも、この刻印の力とやらによるものか」

「はい。この世界は、一言で表すならお金の世界なんです。何をするにもお金が要ります。レベル上げ、職業に就く、階位を得る、スキルを覚える、スキルを使用する、ギルドに入る。全

てに霊貨と契約という仕組みが関わってきます」

職業に就くには、各職業の概念神と呼ばれる神と契約しなければならぬ。

三十六種、下位職から最上位職までの幅があり、上位ほど強力なスキルを買うことができる。そしてそれぞれの職業や階位ごとに、日々この世界で刻印を維持するための費用が異なる。ちなみに無職は一日一枚。

現在のシンたちが、これに当たるといふことだ。

「なるほど、一日が過ぎた俺たちの刻印は、『6 Au』つまりコインが尽きるまで後六日間の猶予があるわけか」

「まーでも、安心してよ。マイナスになってもある程度までなら大丈夫なんだ。具体的にいうと、君たちの場合は『7 Au』までは刻印が解除されないからさ」

「つまり、現在の職業により取られる『存在費』の七倍まで借金が可能ということ？」

ピリカの発言に、凜紅が素早く答えを先読みする。

セルティはゆつくりと頷いて肯定を示し、つけ加えた。

「物わかりが良過ぎて皆さん怖いですね……。でも、借金は危険です。破産した場合、今まで得たレベル、職、スキル、階位の全てが失われ、罪人という地位に落ちてしまいます。刻印は奴隷の烙印と化し、刻印を持つ種族に対しての命令に逆らえなくなるんです。そうなったらもう——事実上もう、その人の人生はおしまいです」

「死よりもつらい人生が待っているということね。私たちのいた世界と同じだわ」

どこか楽しげですらある凜紅の余裕に、セルティはやや困惑する。

「ですが、破産しない限りは酷い目に遭うことはあまりないんです。この世界に住む種族は皆刻印を持っていますし、刻印を持つ種族同士で殺し合いはできません。傷つけるのもそうですが、他者を殺せば大きく霊貨が失われるためです。更にベナルティとして、一定期間霊貨のやりとりができなくなります」

どうやら霊貨を奪ったの殺し合いを避けるルールも、しっかりと存在しているらしい。

「ふむ。職業については理解したが、階位とやらは何が違うのだ？」

「端的に言ってしまうと、階位は王様や市民といった、権利に応じた地位ですよ」

セルティの背後に控えていたレストが、金髪を揺らして静かに答える。

「土地に住む権利、家を持つ権利、村長や町長となる権利、そして——ギルドを作るのにも権利が必要です。ギルドマスターは、自分が管理する職とスキルをメンバーに与え、レベルを上げたりする力を持つんです」

「はい。というわけで、今はまだ最低のEランクですが、私もギルドマスターの称号を得ているんですよ！ すごいでしょ？ メンバー収容人数はたった七人しかいみせんので、どうぞ皆さんも契約してくださいね」

満面の笑みを浮かべたセルティの言葉に、シンは心底いやそうな視線を向ける。

「……ちよつと待て、たつた七人の枠がまだ埋まってないだとか？」

「い、いやまあ、そういう日もたまにはありますし。ほら、強力なスキルとかも使えるようになりますよ。お金さえ払えば——」

「超絶怪しいです……」

冥夢の呟きに、シンと凜紅も頷く。

「ああ、別にこのギルドではなくとも良さそうだ。この近くにも別の集落があるようだしな。そこを見てからでも遅くはない」

「ちよつ!? ダメですってば！ 一番近くのギルドの方は——」

セルティが大慌てで叫んだそのとき、衝撃が走った。

ドオン！ と、爆発の轟音がビリビリと大気を震わせ、窓ガラスが衝撃で碎ける。

あまりに唐突な出来事にも動じず、シンたち三強の人類は動いていた。

「きゃっ!?」

セルティをテーブルの下へ避難させ、シンは外を見やる。

同時に先ほど使ったシャベルを拾い上げ、小屋の外へと躍り出た。

「ドラゴンが出たぞおとおつ！ 【ローグライク】 たちの応援はまだかつ!?」

言葉通り空を舞う竜と、ここに住む三種族の自警団らしき男たちが交戦を始めていた。まずは半森精種たちが、手にした弓でそれぞれ矢を射かける。

「《炸裂投射》！」

ウオレット

それぞれが持つ腕の刻印から数値が減り、同時に淡い魔法陣の光が弾けた。

「なるほど、あれがスキルというものか」

刻印の霊貨を消費し、異能を発現する奇跡の力。

おそらくは矢の威力を強化しているはずのそれは、あつけなく飛竜の皮膚に弾かれた。

「——ダメだ！ 目を狙え！ 反撃が来るぞ！」

半森精種たちが声を上げた瞬間、灼熱の咆哮が放たれる。

大砲を炸裂させたような衝撃波が弾け、自警団は遥か後方へ吹っ飛ばされた。

「うわああっ……!？」

絶叫が高い空に響き、炎が雪に覆われた大地を舐める。

先ほどまで平穩に包まれていた安息の地は、瞬時に阿鼻叫喚の地獄と化した。

「あの初速を持つ矢でも通じない、か……」

ならばおそらく、小口径の弾丸すら通さないだろう。

全ての種族たちが行き着く最果ての世界、オーバーボードガイアならではの脅威。正真正銘の怪物というわけだ。

「今の俺ひとりでは、少々面倒な相手だな」

「何をカッコつけてるんですかシン様は!? 今すぐ逃げてください！ ここは私たちが食い止

めます！ みんな——迎撃の用意を」

「ああ、仕方ないさね」

まずは土精種のロゼッタが、ピッケルを手に微笑み、レストが頷く。

「用意はできました」

「なんとか攪乱してみせるよ！」

最後に鳥獣種のピリカが叫び、三種族の代表たちは動き出す。

その傍らでシンが指を立てると、隣の二人が反応した。

ニート暗殺者の枢木冥夢と、偶像神と讃えられるスーパードラゴン帝ノ凜紅は、巨大なドラゴンの強襲という現実にも眉ひとつ動かさず、事態を見守っていた。

「二人とも、この状況をどう見る？」

「何事もなければ、犠牲が出る、です」

「死人は出るけど撃退は可能ってところね。助っ人なしでは歯が立たないわ」

冥夢と凜紅の即答に、シンも頷く。

二人の読みは、おそらく正解に近い。

半森精種の弓兵のスキルが通じなければ、空を飛ぶドラゴンに攻撃は通用しないだろう。

鳥獣種が風を操る魔法を時折放つが、それでもドラゴンはびくともしなかった。

土精種たちも力自慢なのだろうが攻撃は届かず、吐き出される炎にやられ雪の上を転がる。



戦況は圧倒的な劣勢だった。

「それで俺たちはどう出る？ わけのわからない異世界に来てしまい、見たことのない怪物に襲われ、彼らの使うスキルすらまだ使えぬただの雑種<sup>ヒナクリッド</sup>に過ぎないわけだが——」

「何が言いたいんです、か？」

「お前たちは俺の指示についてこられるか？ という意味だ」

「あのドラゴンに勝つ気でいるの？ 私たちこの世界のこと、まだ何も知らないんだけど？」

凜紅のため息に、シンは不敵に微笑む。

「たった一日で土精種<sup>ドラフ</sup>サークルの姫になったお前らしくもない。今はあのお人好しな連中に救われてはいるが、どのみち俺たちの現状は最下層だ。この超級の異世界でまともな生き方がしなければ、避けては通れない課題だ」

「まさかあんだ。こっちでもやる気なの？ あんたの得意な荒稼ぎを」  
<sup>ご都合</sup>訝しげな凜紅の視線を、シンは平然と受け止める。

「この世界には異種族が数千種もいるという、天使や悪魔、神格の存在すら魅了することまでは自信が持てないか？」

「はっ、やっぱりあんた悪党ね。この異世界の中で、もう一度のし上がろうっていうの？」

にやりと確信を込めて凜紅は微笑む。

「でもいいいわ。あんたの作戦通り使われてあげる。ファンは見捨てないのが私の主義だしね」

既に土精種<sup>ドラフ</sup>の一族は攻略したと言わんばかりに、凜紅は胸を張って断言した。

その傍らで、冥夢もガタガタと震えながら、空を見上げていた。

「お前の使う枢木の暗技<sup>あんぎ</sup>は、あのモンスターにまでは通じないか？」

「挑発しても無駄、です。わたしは戦うの、嫌いですから」

「なるほど、では言い方を変えよう。お前の引きこもるための宿が今すぐ壊れそうだな。いいのか、それで」

「……………。わたしに部屋を、くれるですか？」

「約束しよう」

「ポテチとコーラも、ありますか？」

「ない。……が、ジャガイモのような作物は見たからポテチはできるだろう。あとはまあ、これからの交渉次第だ」

「……了解、です」

「——では、これより行動を開始する。俺の指揮通りに動け！」

冥夢の返事を受け、シンが声を張り上げる。

現代の三強による、異世界での初陣が始まった。

試読版第一弾はここまで。試読第二弾も近日公開予定です。

8月新刊「S級御曹司たちがゆく、異世界契約支配者生活<sup>シイラフ</sup>」をお楽しみに！